



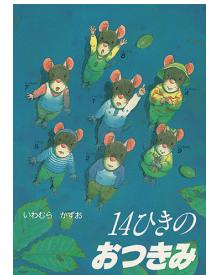
episode 34 おつきみバンザイ！おえかきバンザイ！

投稿者 ふうさま(東京都)

夕飯のあと、洗い物を済ませてリビングに戻った。「はあー、まただ。やんなっっちゃう」とりどりのクレヨンが、テーブルに散らばっている。

さっきも拾い集めた。箱に入れて戸棚の中にしまっておいたのに、また引っ張り出したらしい。おまけに、床の隅っこに絵本が放りっぱなしだ。

「グチャグチャに落書きして、ひどいな。お風呂から出たら、注意しなくっちゃ」



『14ひきのおつきみ』
いわむら かずお 作
童心社 1987年

苛立たしげに拾い上げたら、14匹のねずみたちにじろりと睨まれた。そんなカッカするなと宥めるように——。私は、すばやく絵本を閉じて、テーブルに置いた。

すると、表紙に描かれたといっくんが、頭上を指差しながら囁く。「ほら、月をごらん」

「……え？」

「今宵は満月さ」やさしい呼びかけに誘われるよう、カーテンを開けてみる。

窓から月光が差し込んで、眩しい。

そこに、娘がパジャマのボタンを留めながら、とこここ近づいてきた。

テーブルから絵本を持ち上げて、めいっぱい大きく広げてみせる。「ママ、見て。ごちそうだよー」

「ごちそう？」

「ハンバーグと、サラダと、ポテトスープ」

色鮮やかな落書きがもみじの手で撫でられて、私は深く相槌を打った。「なるほど、お月見パーティーね」

「そう、お月見パーティーだよ」

澄み切った夜空に、まあい月が煌々と照っている。窓辺のソファに座って、ページをゆっくり捲っていく。

滑車にのって、どんぐりの実いっぱいの大木を登る、くんちゃん。

きょうだいたちといっしょに上へ進んでいって、枝を切り、ひもを結んで、お月見台をつくって——。

「ごちそう、とてもおいしそうね」「うんっ」

「おつきさま、きれいだなあー」「ほんと、きれい」

娘と顔を見合させて、にっこり微笑んだ。おつきみ、バンザイ！おえかき、バンザイ！

これからもっと、豊かな想像力がピカピカ光り輝きますように。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2024」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300~450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまつたエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



作者の原風景と実体験から生まれたお話

「おとうさん おかあさん おじいさん
おばあさん そして きょうだい 10ぴき。
ぼくらは みんなで 14ひき かぞく」

この家族紹介のセリフから全作がはじまる「14ひきのシリーズ」は、作者であるいわむらかずお氏の人生体験が基盤になっています。シリーズの発想が生まれたのは、いわむら家の「ひっこし」にはじまります。いわむら氏の転機となった1970年、絵本作家デビューを果たした年のことです。

それまで住んでいた東京の杉並区から、多摩丘陵の日野市に引っ越したとき、雑木林と“再会”したのです。その再会は、31歳のいわむら氏の心にしまわれていた原風景を呼び覚ましたのです。

戦中戦後を過ごした少年時代に、疎開先から東京に戻って、両親と再び生活を始めた杉並の家のまわりには、広い雑木林があって、6人きょうだいの遊び場となっていた自分の原点との“再会”なのです。この再会は、いわむら氏の童心をも呼び覚まして、「14ひき」のイメージが膨らんでいったのです。

構想が膨らむにつれ、「14ひき」の舞台と同じ環境の中で家族と暮らしながら制作活動をしたいと思うようになり、1975年、2度目の「ひっこし」をします。「14ひきのシリーズ」の舞台とは、栃木県益子町の、町はずれの雑木林なのです。

物語の舞台と同じ環境で生活する作家家族

「14ひき」と同じ舞台で生活をはじめたいわむら氏のイメージ世界は、雑木林の中での子どもたちの暮らしと重なり合いながら、確かなものになっていったのです。大事にしたのは、物語を描いていくとき、野原の草や花、森の木、そこで暮らしている昆虫や鳥など、作品の題材となる自然の姿を取材して、丁寧に描くことでした。

そして、もうひとつは、10ぴきの子どもたちを描き

分けることで、一人ひとりの個性を大事にすることです。「自分の子どもたち5人に対して平等に目をかけてやらなくてはと思うのと同じ」で、「もはや、作者というよりオヤジの心境」と述べているくらいです。

そうして、雑木林に暮らしあじめて8年目の1983年夏、「14ひきのシリーズ」は誕生するのです。第1作の『14ひきのひっこし』と、『14ひきのあさごはん』の2冊を同時に発表しました。

『ひっこし』は、自身の“益子へのひっこし”が背景にこめられていて、家づくりや道普請、苦労した井戸水など、モデルは自身と家族です。また、『あさごはん』には、すがすがしい朝の雑木林の感動と、遠い昔、杉並の雑木林の中で暮らした家族への思いがにじみでていると言います。

今日もイキイキと活躍する14ひき

シリーズ6作目の『14ひきのおつきみ』で、きょうだいが力を合わせて木の上にお月見台をつくるシーンは、いわむら氏が幼い頃、木の上につくった隠れ家の想い出が再現されています。

また、14ひきの視点になり、昼から夜の変化を何日も観察して完成した作品です。『おつきみ』を描いた1987年の中秋の名月は、例年より遅い10月7日で、その翌日も十六夜の月の出を観察したことが作者のエッセイに記されています。とことん観察して、優美な『14ひきのおつきみ』が完成したわけです。

「14ひきのシリーズ」は、2023年に刊行40周年を迎えたが、翌2024年12月、いわむら氏は絵本作家55周年を目前にして、他界されました。でも14匹は、12か月の行事を通してイキイキと活躍し、大自然の美しさを今日もみせつけています。

文献

- 1) いわむらかずお: 14ひきのアトリエから, 東京, 童心社, 1991.
- 2) JPIC編集部 編: ここにちは! 絵本作家さん「いわむらかずおさん」, この本読んで! 16(4), p.41-47, 2016.
- 3) MOE編集部 編: いわむらかずおと14ひきの物語, MOE 25(10), p.71-77, 2003.